

ボウルトン・ウオット文書について

大河内 暁 男

一

蒸気機関を世に送り出して産業革命の重要な推進力となったボウルトン・ウオット商会は、その営業文書類が大量に残されていて、現在まで保管されている点でも、経済史家の間に名を知られている。一八世紀のイングランドで金属工業の最大の中心地であったバーミンガムにおいて、金物製造業で成功していたマシユウ・ボウルトンが、一七七〇年代にスコットランドのグリノックからやって来たジェイムズ・ウオットと、蒸気機関製造のためのパートナーシップ（いわゆるボウルトン・ウオット商会）を一七七五年に結成して以後、この企業は、数度の改組を経つつ、約一世紀存続したが、この当初からおよそ一九世紀半

ばに至るまで、産業革命進行のさ中の各種営業記録が、散逸することなく残っているのである。

現存の文書のうち、そのほとんどは、一半がバーミンガムの市民図書館（Reference Library）の郷土史部に、他の一半が同じくバーミンガムの銀分析所（Assay Office）図書室に保管されており、この他Doldowlodに住むウオット家（当主David G. Watt）にも、ウオット関係文書が一部Doldowlod Papersとして所蔵されている。⁽¹⁾これら文書自体は、ボウルトン・ウオット商会が有名なるが故に、比較的早くから研究者に知られ、一部は利用もされてきた。試みにこの文書を用いた代表的研究を列挙してみると、次のようなものがある。⁽²⁾

J. Lord, Capital and Steam Power 1750-1800, 1923.

H. W. Dickinson & R. Jenkins, James Watt and the Steam Engine, 1927.

E. Roll, An Early Experiment in Industrial Organisation, 1930.

H. W. Dickinson, James Watt, Craftsman & Engineer, 1935.

do., Matthew Boulton, 1937.

J. E. Cule, Finance and Industry in the Eighteenth Century: the Firm of Boulton and Watt (Economic History, Vol. V, No. 15), 1940.

A. E. Musson & E. Robinson, The Early Growth of Steam Power (Economic History Review, 2nd Series Vol. XI, No. 3), 1959.

このように見ると、すでに数多くの研究が行なわれているではあるが、これまでに利用されてきた文書は、私の見た限りでは、現在する文書のうち極く限られた部分に過ぎないようであり（つまり原史料がそれほど膨大なのである）、今後の経済史および経営史研究にとって、新視角新分析方法による史料の再利用を含めて、このボウルトン・ウォット文書の史料的价值は未だ尽きないと思われる。しかも、この文書が、どのような内容のものが、何処に、どのような形で、どれほど残っているのか、という実態は、必ずしも研究者に知られていない。昨夏現物の一端に触れた者として、知り得た限りで（と言うのは、全資

料に目を通した者はいないので）その輪郭だけでも紹介しておきたいと思う。

(一) 以上のほかの現存資料については H. W. Dickinson, James Watt, p. 201 を参照。

(二) ボウルトンおよびウォットに関する文献は、J. Lord 前掲書第二版に附された W. H. Chaloner の解題に、一九六四年までの主要なものが挙げられている。

二

さて、この史料の特徴は、単に産業革命期の主導的企業の営業文書であるということではなく、それが、帳簿類と書簡覚書類を含めて、企業活動の全面にわたって極めて網羅的かつ継続的であり、しかもその量的規模において正に長大であること、加えて、市民図書館に保存されている部分については、完全に自由に一般に公開されていることである。（銀分析所図書室に保存されている部分については、一般に公開されてはいない。しかし同所所長の許可を得て閲覧できる）。

市民図書館所蔵の文書は、史料本体とも言うべき Boulton and Watt Collection と、これに対してやや補充的性質の Muthhead Papers の二部分から成っており、その由来は大概次の如くである。まず Boulton and Watt Collection について。一八四八年に、ジェイムズ・ウォット・ジュニア（ジェイムズ・ウォットの息子、マシユウ・ボウルトンおよび父ウォットの蒸気

機関製造企業の後継経営者)が死去したのを機に、それまでのパートナーシップ Boulton, Watt and Co. が解散し、ソホウ製造所は操業を中止して一八五〇年に競売に付され、⁽⁴⁾ やがて、ウォットの住居であった Heathfield House を含めて、当時バーミンガムで水圧ジャッキ、プレス等を製造して成功を収めていたタンギ兄弟商会 James Tange and Brothers の手に渡った。この折、ソホウ製造所建物内に、ボウルトンとウォットが経営した諸商会、すなわち Boulton and Watt (1775-1800), Boulton Watt and Sons (1794-1800), Boulton, Watt and Co. (1800-1848) 等の営業文書類が残されていたが、⁽⁵⁾ この相続物の価値を正しく見抜いた「(ロード) リチャード・タンギ」の手で保管され、リチャードの没後、ジョージ・タンギによって一九一一年にバーミンガム市に寄贈され、これが一九一五年に Boulton and Watt Collection として市民図書館で公開されるに至ったものである。⁽⁶⁾

(c) W.K.V. Gale, Boulton, Watt and the Soho Undertakings, pp. 30, 34. この工場建物は一八六三年に取り壊され、現在は Factory Road という街路名が残るのみである。一七九五年以来、ボウルトン・ウォット商会は、ソホウ製造所とソホウ製造所の二工場を持っていた。ソホウ製造所だけは、一八四八年以後も、ジェームズ・ウォット商会の名称のもとに、引続き操業したが、一八九五年にバーミンガムの計量器製造会社 Avery (W&T), Ltd. に売却されて現在に至っている (A. Howard & E. New-

ボウルトン・ウォット文書について

man, British Enterprise, p. 33 ; W.K.V. Gale, Soho Foundry—Some Facts and Fallacies, Transactions of the Newcomen Society, Vol. xxxiv.)

(4) 一七九〇年にジェームズ・ウォットが建て、一八一九年死去の時まで使用した。有名なウォットの屋根裏仕事場はこの家にあつたが取壊され、ここに残されていた約六千点にのぼるウォットの遺品——様々の工作機械や道具類を含む——は、ロンドンの科学博物館に移された。H. W. Dickinson, The Garret Workshop of James Watt を参照。

(5) R. E. Waterhouse, A Hundred Years of Engineering Craftsmanship, Tanges Limited, 1887—1957 を参照。

(6) Sir Richard Tange タンギ兄弟のうち三男。一八三二—一九〇六。The Rise of a Great Industry の著者。

(7) タンギ兄弟の末弟。一八三五—一九二〇。ジェームズ・ウォットの旧居ヒースフィールド・ハウスの保著者

(8) A. Briggs, History of Birmingham, II, p. 112 を参照。ジョン・ローは本史料を Tange MSS. としつ引用している。なお、ロードおよびウォルが、本史料の由来を、一九一三年リチャード・タンギにより寄贈としてゐるのは誤まり。

Muirhead Papers は L. B. C. L. Muirhead が一九二一年に市民図書館に寄贈したもので、J. P. Muirhead が、その著書 Origin and Progress of Mechanical Inventions of James Watt (1884) ならびに Life of James Watt (1889) 執筆にあ

たつて、Doldowlodのウオット家にあった文書類の中から持ち出したままになったものと考えられている。そしてウオット家に残されていた残余の文書が現在も同家に保存されて、いわゆる Doldowlod Papers となっているわけである。

銀分析所保蔵の文書は通称 Boulton Papers と称ばれ、ボウルトン家 (Tew Park, Oxon) が、マッシュウ・ボウルトン父子に関する所蔵書簡類を、一九二六年、マッシュウ・ボウルトン所縁の事業として継続されていた銀分析所に寄託したものである。

(9) パーミングムの銀分析所は、一八世紀当時金属装身具裝飾品の生産地としても知られた此の地の製造業者の強い要望を背景に、マッシュウ・ボウルトンが先頭に立って設立運動を行ない、一七七三年に認可(ジョージ三世第十三年冬令五二号)された。ここで行なわれた分析第一号はボウルトン・フォートギル商会製の銀器であった。分析所は現在まで継続しており、当時の建物も現存す。(H. W. Dickinson, Matthew Boulton, pp. 64-7)を参照。
なお、ボウルトン家は寄託文書の返却を要請しており、銀分析所では目下全史料をマイクロ・フィルムに収める作業を進めている。ロードはこの史料を Tew MSS. として引用している。

III

市民図書館所蔵のボウルトン・ウオット・コレクションは、史料総点数不明(一九六七年七月現在)と言われる膨大なものであるが、内容から大別すると次の四群になる。

(1) 蒸気機関および各種附属品その他機械類についての図面。約三六、〇〇〇葉現なし、機械や部品の種類、発注者名、製作者名、据付地名等から原図を検索できるよう整理されている。

(2) 発信文。Office と Foundry の二群に分けられており、それぞれ歴大な letter books に年代順に整理されている。Office の部は一七七三年から一八一五年までの発信文、(鑄造所関係を除く)、Foundry の部は一七九四年から一八七五年までのソハウ鑄造所関係発信文がその内容をなす。両者とも年代順および人名別の簡単な索引が各巻に付けられており、Office Book については一八〇〇年以前の部分のみ詳細な人名索引が別に作成されている。一七七九年までの発信文は書記等が筆写したもののか、その要約が残されているのだが、一七七九年以後は、ウオットとジェイムズ・キアの発明による転写器を用いて、発信文はすべて転写され、コピーが残されている。

(10) 転写器は一七八〇年二月にジェイムズ・ウオットの名で特許を得たが(第一二四四号)、実際はボウルトンの友人ジェイムズ・キアとウオットの共同発明で、元来ボウルトン・ウオット商会の事務用に工夫された。しかし特許獲得の後は市販が試みられ、この製造販売のために、ボウルトン、ウオット、キアの三人でパートナーシップが結成された。なお、ボウルトン・ウオット商会で用いられた転写器の一台は銀分析所に保存されており、現在もなお使用可能である。

(3) 営業記録、帳簿類。最も早期のものはソハウ製造所の En-

gine Ledger(1777)から始まり、最後は一八九四年の Account
までであるが、同一帳簿が必ずしも一貫して残ってはいない。
各種帳簿類が最も豊富に残っているのは一八世紀末から一八四
〇年代までの期間である。

(4) 受信文、契約書、覚書、その他家族内の書簡類等。ボウル
トンとウォットの往復書簡もかなりの数がここに含まれてい
る。総点数は不明である。

以上のうち(3)と(4)については、図書館が作成した総索引があ
り、受信書簡については差出人、受取人、もしくは手紙の主内
容から検索できるようになっており、また不完全ながら年代順
索引も準備されていて、原史料への接近を容易にしている。

このうち(3)営業記録、帳簿類は、その内容が多種にわたって
いるが、主要なものと残存期間を列記してみると、次の如くで
ある。

Account 1784, 1797-1801, 1807-11, 1816-24, 1829-61, 1868-
72, 1882-94
Balance Book 1779-89
Buildings & Machinery Account 1802-48
Cash Book 1795-1851
Day Book 1795-1823
Engine Day Book 1792-1809, 1814-18, 1820-48, 1875-83
Engine Book 1797-1830, 1847
" 8-10HP. 1817-58

ボウルトン・ウォット文書について

" 14-20HP. 1815-50

Inventory 1783-93, 1797-1800, 1803-40, 1879

Journal 1804-48

Ledger 1797-1861

Order Book 1790-1859

Piece Workers Ledger 1825-46

Property Book 1797-1823

Wage Book (Foundry) 1795-97, 1840-52

Weekly Wages & extracts 1826-47, 1866-73

以上のほか、断片的な帳簿類は極めて多数ある。ところで、
右に掲げた帳簿類にしても、例えば、財産目録が一八〇三年か
ら四〇年までが一貫した記載になっているのではなく、この間
の帳簿は、一八〇三―一八〇四、一八〇五―一八〇七、一八〇
七―一八〇七―一八〇八、一八〇九、一八一〇、一八一四―
一八一六、一八一七―一八一八、一八一九、一八二〇、一八二五
と、年代的に重複の著しい二種類のものから成り
立っている。元帳その他の帳簿類いずれも同様の状況である。
したがって、いずれの帳簿にしても、その取扱いは、年代的重複
部分および一帳簿から他の帳簿に移行する過程について、十分
細心の比較検討が必要である。

つぎに、同じく市民図書館所蔵のミュージアムヘッド文書は、そ
の由来から、ボウルトン・ウォット・コレクションとは独立の
史料群になっているが、内容自体からみれば両者合体としても

差支えないもので、内容別、年代別に、後者と共通の索引が作成されている。この文書群には、マシユウ・ボウルトンとパートナーシップを結成する以前、グリノック時代のジェイムズ・ウォットを中心に、父トマスを含めたウォット家の書簡類（一六九四年から始まる）、ジェイムズがバーミンガムに移住して後のジェイムズおよびジェイムズ・ジュニア父子の往復書簡類、その他覚書や遺言書など、ジェイムズ・ウォットの身辺に関する記録が多数含まれており（J・P・ミューヘッドがこの文書群をウォット家から持出した理由もここにある）、さらに、グリノック時代のウォットの営業文書も若干ここに見出される。これと並んで、ウォットとボウルトンとの共同企業のうち、特にソホウ鑄造所に関する営業文書の一群が、ミューヘッド文書の一半を成しており、ボウルトン・ウォット・コレクションの第三群を補っている。その主なものを挙げてみると次の如くである。

Account 1795-1818
Balance Sheet (Boulton and Watt) 1783, 1792-1800, 1803
-16
Balance Sheet (Boulton, Watt and Sons) 1795-1817
General Expenses of Trade 1798-1803
Miscellaneous of Trade 1786-1801
Goods sold by Boulton and Watt 1782-95
Particulars of Salaries &c. 1805-13, 1815
Sales Amount 1802-1817

Trade Account 1810-1815

銀分析所に保管されているボウルトン文書は、以上の市民図書館所蔵史料群とは若干趣を異にしている。まず、此のボウルトン文書は、その大部分が書簡と覚書類で占められていることである。しかもその内容から見て、蒸気機関製造を主たる業務とするボウルトン・ウォット商会以外の、多方面にわたるマシユウ・ボウルトンの企業活動に関するものが極めて多いことが特徴的である。

マシユウ・ボウルトンは、人の知るように、バーミンガムで装身具等小金物類 (cos) の製造業者として繁栄していた事業を、一七五九年に父マシユウから受け継いで実業界に出たが、事業拡張のために、一七六二年に、外国市場の事情に明るいジョン・フォトギルとパートナーシップを結成した。このパートナーシップは一七八一年まで続いたが、この間一七七五年にウォットと蒸気機関製造のためのパートナーシップを結び（一八〇〇年解散）、一七七八年にエジントン画の製造を目的としたボウルトン・エジントン商会、一七八〇年には転写器製造を目的にボウルトン・ウォット・キア商会、一七八二年にはボタンやバックル製造目的でボウルトン・スケール商会、一七九四年にソホウ鑄造所経営を目的にボウルトン・ウォット父子商会、一七九五年に造幣所経営のためボウルトン商会を設立する、という工合に、多数の企業を併営していた。企業者ボウルトンのこのような多面的活動とその背後にある個人的交遊についての書

簡類が、銀分析所保蔵ポウルトン文書の主内容を成し、蒸氣機関製造以外のポウルトンの活動分野の研究に不可欠の史料となつてゐるほか、ポウルトンとウォットの往復書簡も多数ここに含まれてゐる。

書簡は受信と発信に分けられ、受信については、発信人、発信については宛先人別に、計十四巻からなる大索引が作成されており、さらに受信については、人名索引と並んで、簡単な内容要約が部分的に作られていて、検索を助けている。受信や覚書類は、大部分が発信人の名前でABC順に整理されており、一部分は内容によって（例えば造幣所関係の如く）整理されている。また、書簡覚書の類には、一枚一枚かなり詳しく要約がつけられている。これらは約一八〇函の大ボール箱に収容されている。発信については、市民図書館所蔵の文書と同じく、一七七九年までのものは書記による複写であり、それ以後は転写器を用いたコピーで保存され、年代順に整理されている。ここでもまた史料総点数は数えられていない（一九六七年七月現在）。以上の他、未整理で目録が作成されていないものとして、ポウルトン家、農場、運河、コーンウォール鉱山等の元帳、ポウルトン・フットギル商会の現金出納帳、元帳、収支計算帳などがある。

(11) 参考までに、この函は四五×三三×二センチほどのもので、私が閲読した函の一つキア函には、約二百通の書簡と覚書類が収められていた。なお、銀分析所では史料保存に並ならぬ気

ポウルトン・ウォット文書について

が配られているが、これは同所所長ウェストウッド氏の努力によるところ多大である。

四

以上がポウルトン・ウォット商会を中心とする史料群の大略である。この膨大な史料は、ポウルトンおよびウォット父子二代の企業者が、産業革命のさ中に、イギリス随一の機械工場を作りあげてゆく過程を、多角的に伝えており、殊に一八世紀末から一八四〇年代に至る期間は、帳簿類が大量に残されていることとあいまって、史料的に極めて豊かである。経済史、経営史、会計史等、様々の局面からの分析研究が可能である。

取り分け経営史研究にとって、この史料群は有益である。と言うのは、企業内外の客観的諸条件を企業者ポウルトンが一身に結合して、彼の思考、判断、将来の企業活動の構想、意志決定、企業の指揮という様々の能力——ポウルトン独自の才能や人格個性がこの点で大きな要因となることは言うまでもないが、より広くは、そうした能力人格個性が形成され規制され、また、その運動が可能となる環境の精神状況、とくにルナー・ソサエティを通して受けた様々の影響と、同時に逆に、ポウルトンがこの環境に与えた影響も、ここに深い関わりがある——を媒介に、企業活動を展開した軌跡をたどり（蒸氣機関製造は彼の企業構想の一角に過ぎなかつた）、その結果については、営業成績を客観的尺度として判定しうるわけで、企業者活動の全過程

を追跡解明できる可能性を与えているからである。

なお、バーミンガム市民図書館およびバーミンガム銀分析所の所在地は次のとおりである。

Reference Library, Birmingham 1, U. K.

The Assay Office, New Hall Street, Birmingham 3, U. K.